

旅への思い

ばしょう

——芭蕉と『おくのほそ道』——

旅立ち

伊賀国上野いがのくにのうえのに生まれた芭蕉ばしょうは、寛文十二かんぶん（一六七二年）、二十九歳の時に江戸へ赴おもむきました。初め、日本橋にほんばしに住み、一六八〇年から深川ふかがわへ移りました。深川では、門人から贈おくられた「芭蕉」を植え、よく茂しげったことから、草庵そうあんを「芭蕉庵」と名づけ、俳号を芭蕉としました。

一六八四年の『野ざらし紀行』の旅から、本格的な漂泊時代ひょうはくが始まります。この時、芭蕉は四十一歳です。旅先では、その土地の俳人たちと交流しました。一六八七年には『鹿島紀行』と『笈の小文』あいのこぶみの旅、続いて一六八八年には『更科紀行』さらしなの旅に出ました。そして、一六八九年三月に出発したのが、東北・北陸の各地をめぐり、大垣へ着くまでの『おくのほそ道』の旅です。



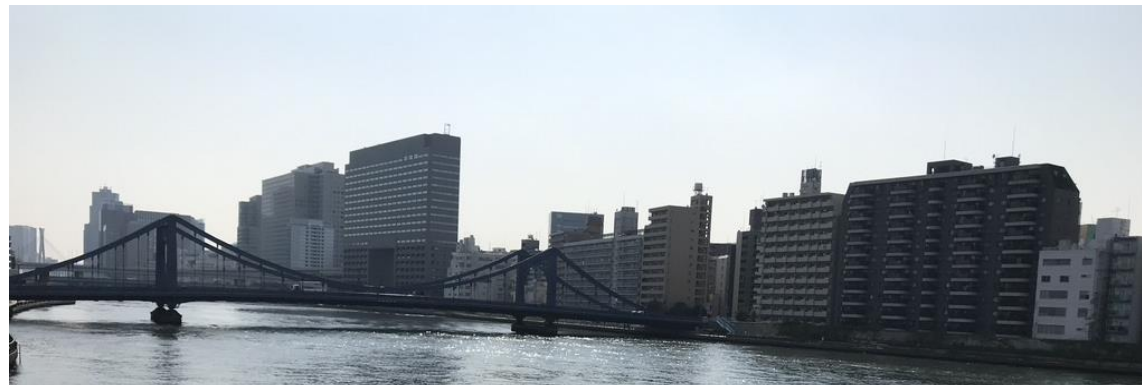
閉園後に回転する芭蕉翁像
（芭蕉庵史跡展望庭園）



あと
芭蕉庵跡



旅姿の芭蕉（採茶庵跡）



芭蕉庵史跡展望庭園から見た清洲橋きよす

芭蕉は『おくのほそ道』の旅への出発に際し、門人である杉風の別宅「採茶庵」さいとあんへ移り、支度を整えて出発しました。したく



江東区芭蕉記念館前の句碑

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家



「蕉風開眼」の句といわれ、芭蕉の俳句の中で最も広く知られる一句（清澄庭園）

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉庵の近隣の句碑